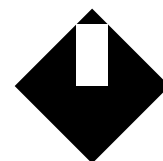


公認会計士稲門会



「AI 時代到来と建学の精神、 そして監査業務」



渡辺 俊之
(昭和43年 第一商学部卒業)

1. 大隈重信公の人気

公認会計士稲門会の会長を仰せつかり3年目に入ろうとしています。当然の事ながら早稲田大学というものを強く意識し、建学の精神やら佐賀出身の大隈重信公が、何故長崎の地方役人から、中央の世の中に認められていくようになり、二度も総理大臣になったのかに関心を持たれます。

佐賀の大隈記念館にも足を延ばしました。神田川の北側の丘（南側斜面）には川を見下ろす権力の館である、山縣有朋邸（椿山荘）、細川家屋敷跡（永青文庫）、田中角栄元総理邸、鳩山一郎元総理邸（鳩山会館）が建ち並びます。

大隈公が何故山縣邸から見下ろされる神田川の南側の低地を選んだのか？

興味が湧いてきますが、その庶民性故に、山縣有朋公の葬儀の10倍もの会葬者（30万人）があったという人気の秘密があったのかもしれませんが（ちなみに吉田茂氏の戦後初の国葬は3万5千人）。

2. 早稲田大学の建学の精神

会計研究科の卒業式では例年公認会計士稲門会の会長として祝辞を述べています。他大学からの入学者が殆どで早稲田大学の校歌さえ知らない人

が沢山います。

そこで建学の精神を見直し、これからの AI 時代にどう向かうべきかの話もしました。

今更ながらですが建学の精神は、1「学問の独立」、2「学問の活用」、3「模範国民の造就」となっています。

大隈重信公は得業式兼東京専門学校創立15周年での祝辞で、社会に出た後に失敗をしても、失敗をしても、勇気をもって経験を重ね続けること、そして学問を通じて知恵を磨くことの重要性を説いています。

アリババの創始者ジャック・マーも同じことを言っています。「失敗は成功のためのひとつの過程に過ぎない。それを心得ることが、成功者に近づくための第一歩である」と。

3の「模範国民の造就」というと古めかしいイメージですが、高田早苗学長風に言えば「ジェントルマン」たれということのようです。

3. 人工知能（AI）の時代の生き方

「模範国民の造就」を考えるにあたって、AIの第一人者である松尾豊東大教授の講演を思い起こします。

知識とか知能は、ウェブ検索で幾らでも探せるので、頭の中に入れておく必要はない。外国語も学ぶ必要なく日本語で喋れば、そのまま相手は母国語で聞ける時代になり、相手の表情をも読みながらの議論が母国語同士ロボット翻訳で、できるようになるという。翻訳は人間より AIの方が上になるとのことです。

そして司会者が質問しました。自分の子供に何を学ばせますか？ 教授曰く「一生役に立つスキルを身につけるのは、もはや不可能です。コミュニケーション能力を身につけ、人間性を磨かせるには、野山に行って遊んでこいと言います」と。

すなわち 人格形成こそ重要だということでした。

このことは AI 時代に要求される監査人にも当てはまります。

4. AI 時代とこれからの監査業務

最近「人工知能が公認会計士に及ぼす影響」という研修を受けてみました。

原則的には試査を前提として育っている我々世代の公認会計士。しかし AI の時代になると精査が当然だとその講師は言います。

証拠書類もすべてデジタル化され、当然に取引の裏付けとなる証拠書類も全点チェック。

リードスケジュールとか分析の手続きも当然に自動化。預金や売掛金等の確認も電子データでの直接確認。

さてこうなると我々の業務はどのように変化するのでしょうか？

5. 職業的懐疑心と監査人の聖人化

会計不正の根本原因への監査対応との関係で「職業的懐疑心」というキーワードへの関心が集まっています。昨年の福島研究大会でも議論されました。

「職業的懐疑心」という言葉は紳士的かつ抑制気味な表現ですが、言葉を換えれば「人を見たら泥棒と思え」、「性悪説」、「胆大小」、「七度尋ねて人を疑え」、「治に居て乱を忘れず」とかに置き換わりかねません。

一方、被監査会社役員等とのコミュニケーションの重要性もより一層に問われています。

リスクやガバナンスにかかる情報等の非財務情報への入手についても積極的にかかわる必要性が問われます。職業的懐疑心は心底にありながら、経営者等の懐の中に入り込まなければなりません。内部統制やらコーポレートガバナンスの範囲外の事象への対応も必須となっています。

このような対応スキルを身につけなければこれからの監査は難しくなるかもしれないと痛感します。

さて監査人たる公認会計士としてはどうすればよいのでしょうか？

建学の精神である、学問の独立の過程を経て、実務での失敗をも恐れることなく、学問の活用をされてきている公認会計士稲門会の諸氏。

三つめの建学の精神は、大隈公や高田早苗学長の時代から激変してますので、私なりに無責任ですが、提言させていただきます。

「人格円満な聖人であれ」しかし「聖人たれ」を全員に求めるのは無理なので「洞察力を備えた人間性豊かな人格者たれ」と変えます。

ただしコミュニケーション能力が高く、人格が円満だけではだめでしょう。ガバナンス外の事象への洞察力、適正処理への指導力・説得力をも兼ね備えた人格者像が求められるのかもしれませんが。

と、ここまで書きましたが、いまだ現役で監査業務を行ってはいらるものの、この業界からの退出を求められそうな年齢に差し掛かってしまったので、無責任ですがそろそろ言っぱなしにして筆をおきます。

平成 29 年度定期総会のお知らせ

平成 29 年度定期総会は、下記の通り開催の予定です。会員はもとより早稲田大学で教鞭をとっておられる先生方、他大学よりの来賓の方々も多数出席され懇親のよい機会です。是非多数の会員に参加をお願い致します。

日 時 平成 29 年 7 月 4 日(火) 午後 6 時 30 分より
場 所 大隈会館 201・202 号室

「公認会計士稲門会奨学事業」 －平成28年度奨学事業報告－



(奨学事業委員会委員長)

小西 彦衛

(昭和44年商学部卒業)

本奨学事業にご理解をいただき、奨学資金をお寄せいただいております多くの会員の皆様へ敬意を表するとともに心から感謝申し上げます。毎年の事業報告を書きながら頭が下がる思いをしております。

本奨学事業はアジア地域からの留学生を対象にしています。早稲田大学は草創期から今日までアジアとの学術及び人材の交流に重きをおいています。アジア地域からの留学生を支えることは、近隣諸国との友好親善のためにも有意義なことと存じます。

奨学金給付の概要

皆様からの奨学資金を原資として、毎年、留学

生4名に各50万円の公認会計士稲門会奨学金を給付しています。奨学生の選考要件は、

- ①アジアと日本の友好親善という目的を理解する
- ②将来は母国で社会的に活躍する志望がある
- ③他の奨学金を受けられず、生活に困窮している
- ④学業成績は問わない
- ⑤学部3年生以上または大学院生 です。

奨学資金は、“広く薄く”を方針として、より多くの皆様に無理のない拠出をお願いしています。有為な人材を育む本事業を永く続けるために、幅広い卒業年次の会員の皆様の参加をお願いいたします。

寄付金の取扱い

奨学資金は早稲田大学への寄付金として、所定の振込用紙で大学の口座に振り込んでいただいております。総長名の領収書と所得税の寄付金控除の証明書等が発行されます。

早稲田大学のWebサイトから常時寄付申込みができます。[早稲田 寄付] [検索] で寄付トップ画面に入ります。寄付申込みフォームにインプットする際に、「寄付の種類」は「奨学金」を選び、「指定先」は「公認会計士稲門会奨学金」を選びます。支払方法はクレジットカード決済又はインターネットバンキング決済(ペイジー)です。

総長室社会連携課募金担当が寄付金に関する事務を担当しています。



平成28年度の事業実績

1. 奨学金の支給状況

大学より次の4名を奨学生として推薦いただき、各人に50万円を支給しました。

ARIANTO,Michael	基幹理工学部	3年	インドネシア
TECHAPICHETVANICH,Vanessa	創造理工学部	3年	タイ
林 媚璐	会計研究科	2年	中国
李 鎬式	環境・エネルギー研究科	博士課程	2年 韓国

今年度奨学生からの寄稿文を本号に掲載しております。

2. 奨学事業収支年度別一覧(単位:万円)

年 度	H3~H24年	H25年	H26年	H27年	H28年	累 計
寄付金収入	4,852	199	135	121.5	107.5(注)	5,415
(寄付者数)	(平均65名)	(56名)	(49名)	(45名)	(43名)	(1,688名)
奨学金支給額	4,400	200	200	200	200	5,200
(奨学生数)	(88名)	(4名)	(4名)	(4名)	(4名)	(104名)
資金繰越残高	452	451	386	307.5	215	

(注) 平成28年度は期末近くの振込みで次年度扱いのご寄付を加えて157.5万円です。

3. 平成28年度寄付者芳名(順不同・敬称略) 平成29年3月31日現在

渡辺 俊之	近野 博	勝島 敏明	藤田 世潤	奥山 章雄	安村 長生
内田 善三	小林 晟祐	佐藤 正典	猪股 世紀	社本 公一	里村 豊
西山 隆司	関根 愛子	高井 宏司	水野 義雄	鈴木 豊	石田 清絵
山口 俊明	山田眞之助	上野 紘志	尾崎 隆昌	石原 裕	小林 正樹
戸田 厚司	金田 賢二	七松 優	長峯 徳積	黒沼 憲	杉田 純
塚田 知信	堀内 三郎	渋谷 道夫	伊勢 利一	久保 直生	岡野 雄次
松下八寿彦	小暮 和敏	堀 秀行	大滝 史博	四月朔日丈範	関口 典子
小西 彦衛					

以 上

会費納入のお願い

今年も会費納入の季節となりました。同封致しました振込用紙で御振込頂ければ幸いです。なお、日本公認会計士協会準会員の方は、印字されている金額を3,000円にご訂正のうえ御振込頂けます。また、ご自身の会費納入状況をお知りになりたい方は、会計担当の副会長もしくは常任幹事にご連絡下さい。

公認会計士 6,000円 日本公認会計士協会準会員 3,000円
(振込先 郵便振替口座番号 00170-2-163893 口座名 公認会計士稲門会)

「今後の夢・抱負、 早稲田大学での生活・思い出等」



李 鎬式

(環境・エネルギー研究科/
博士後期課程 2019年度卒業予定)

こんにちは。平成28年にみなさんからの寄付金で運営されている「公認会計士稲門会奨学金」に採用されました李鎬式と申します。

僕は、他の学生とは異なり、二人の子供を持つ父です。徴兵の義務がある韓国人の学生は、徴兵の義務を終える前に、博士課程までストレートに勉強を続けられなく、勉学が途切れてしまうことが一般的です。そのため、博士課程への留学を考える韓国人は、既に社会に進出していれば、安定していた会社を後にし、家族を連れて冒険に出る人が多く、僕もその一人です。「親の背を見て子は育つ」ということわざのように、安定した生活に留まらずに、自分の夢を追い続ける挑戦する姿勢が子供たちにもいい影響を及ぼすと信じていたので、家族を連れて、僕の専門である電気自動車、燃料電池自動車の世界を先導している日本への留学を決断致しました。日本は、比較的に外国人留学生向けの奨学金が多く、奨学金をもらう前提で留学費用を計算していたのですが、現実思ったより厳しかったのです。会社での勤務経験を持っている僕に奨学金の機会は中々訪れなく、経済的理由で、留学を辞退することも悩むほどでした。その時に、「公認会計士稲門会奨学金」に採用され、学費を納めることができ、諦めず自分の夢を追い続けさせていただいております。みなさんには本当に感謝しております。

僕は世界の環境問題でもある地球温暖化を抑止する研究に取り組んでおります。その中でも、我々の身近に存在し、既存のエンジン技術では大量の環境汚染物質を排出する「ゴミ収集車」に着目し、二酸化炭素の排出量を抑えることだけでな

く、走行中には有害な排気ガスを排出しなく、音も静かになる日本初の「燃料電池ゴミ収集車」を開発しております。今は、試作した車両が山口県周南市の徳山駅周辺のゴミ収集ルートで1年間の実証試験を行っており、季節変動などによる影響が読み取れる貴重なデータを取得しております。この研究で、既存のディーゼルゴミ収集車に比べ、約40%の二酸化炭素が削減される成果を得ており、また、有害な排気ガスを排出しなく、音も静かなことから、周りの住民からの評判も良く、ゴミ収集時の住宅街環境改善にも役立っております。今後、この研究は、今回の対象地域であった山口県周南市だけでなく、全国、全世界のゴミ収集車の電動化のための「地域のゴミ収集ルートに合った電動車両の設計ガイド」の研究も進めており、全世界のクリーンなゴミ収集事業を支える研究に発展させております。この「設計ガイド」は、自動車シミュレーションなどの高度な研究設備が整えられていない技術的に遅れている国、地域でも自分たちのゴミ収集ルートの日誌さえ付けて置けば、その地域に適した電動ゴミ収集車の設計提案を計算してくれる設計ツールであります。このツールを全世界に広げ、全世界のゴミ収集事業をクリーン化したい強い願望で研究を進めております。

2019年度には、この研究も終了し、僕も卒業をする予定でございます。卒業をしてからのことはまだ何も決まってはおりませんが、地球の環境を常に認識した研究に取り組んでいきたいと思っております。

今年の3月に行われた「2016年度自動車技術会 関東支部学術研究講演会」では、この研究をテーマとしてまとめた論文「燃料電池ゴミ収集車の環境性能および実用性に関する研究(第1報)」が「ベストペーパー賞」を受賞いたしました。100件以上の論文のうち、選ばれておりこの研究の充実性と将来性を認められたのであります。そして、研究成果を全世界に発信するために、アメリカ電気電子学会やアメリカ自動車工学会などでの学会発表を予定しております。このように、研究が順調に行われ、かつ、良質の論文が書けているのも全てみなさんのご支援があったから成り立っていることです。本当にありがとうございます。

「今後の夢・抱負、
早稲田大学での生活・思いで等」



テチャピチェットヴァニッチ ヴァネッサ
(創造理工学部在学中 2018年9月卒業予定)

私は、早稲田大学の熱燃焼エンジン研究室のメンバーです。私の研究テーマは、ハイブリッド電気自動車(HEV)とマツダの HCCI Skyactiv エンジンです。HEV 研究の主な目的は、それぞれの自動車の燃費を最適化することです。MatLab や QSS Tool Box などのソフトウェアを使用することで、ディーゼル、ガソリン、HEV 車のエネルギー効率のデータを集めて比較できます。私は今、マツダの HCCI 車の燃焼制御について研究しています。日本ではこれから HEV 車と HCCI 車の仕様が增加すると考えられるので、これらの研究は非常に有益だと考えられます。

学問のほかに、私はボランティアに非常に興味があります。最初の夏休みに、私は夏のキャンプで英語教育のためにボランティアをしました。大学 2 年の夏休みに、私はフィリピンでの 1 ヶ月間のコミュニティサービスの Disaster Risk Reduction (DRR) leader としてタイの代表者に選ばれました。また、早稲田の ICC が ASEAN の交流イベントを企画するのを手伝って、早稲田国際コミュニティセンターにも積極的に参加しています。今年の春学期、私は TED X 早稲田大学の学生スピーチコンテストに参加しようとしています。うまくいけば、私がスピーカーとして選ばれたら、多くの人にインスピレーションを与えることができるでしょう。

私はデジタル技術のビジネス分野に情熱を持っています。いずれ MBA を取得する予定ですが、その前に数年間働きたいです。私は最近、タイの GE Digital で 2 ヶ月のインターンシップを終えました。このインターンシップから、私は多くのインスピレーションを受けました。将来私はタイの発展に携わりたいと考えています。卒業後の私の夢は、テクノロジー企業で働くことです。私は、早稲田大学で学んだことと日本で得た工学の知識によって、私が将来働く会社に大きく貢献できると信じています。私は十分なお金を備蓄した後タイに良い教育システムを備えた学校を設立し、地域社会に還元したいと考えています。

「時には昔の話を」



辻山 栄子
(1971年商学部卒業)

まるで映画「紅の豚」の主題歌のようですが、現在担当している学部ゼミの学生さんに昔の自分の学生時代や公認会計士受験時代の話をする、みな一様に目を丸くして驚かれます。それもそのはず。50年も前の早稲田大学商学部の女子学生比率は1%（毎年ほぼ1,500人中の15名程度）、まだ専門学校もない時代の公認会計士の受験勉強は早大CPA研という学生団体が主催して、前年の合格者が週1回ボランティアで後輩の指導をするという時代でした。ただしこの早大CPA研は、学生主体の公認会計士受験組織としては関東随一の存在で、東大や慶応の受験生もここに集まってお互いに切磋琢磨していました。文字通りの古き良き時代で、本当に時間がゆったりと流れていたような気がします。

今回改めて自分の会計士登録番号を確認してみたところ5千番台の早い番号なので、2016年12月末時点の会計士登録者数（準会員を除く）約3万人と比べると、あれから6倍に増えたことになります。日本の女性会計士の数も当時の20名程度（0.5%未満）から今や2割～3割の時代になりました。なんといっても、我が早稲田から協会の女性会長が誕生したのですから、まさに隔世の感があります。

思い返すと早稲田出身の女性公認会計士第1号として、「なぜ会計士を目指したのか」という質問をよく受けてきました。当時は男女合わせても大学進学率はまだ2割程度で、大卒女子の就職先は非常に限られていました。外資系企業の社長秘書などは憧れの就職先でしたが、自分に適性があるようにも思われず、専業主婦になる気など毛頭ない身としては、一生続けられて、しかもガラスシーリングのな

い職業として公認会計士はとても魅力的に映りました。ところが、運よく試験には現役合格できたものの、そこから先は今では想像もつかないガラスシーリングならぬガラスウォール（ガラスの壁）が立ちはだかっていました。信じられないことですが、個人事務所の就職面接で、女性であることを理由に低い賃金を提示されたこともあります。幸い早稲田の先輩の紹介で大手監査法人の朝日会計社（現あずさ監査法人）に迎え入れて貰えましたが、往査先では事務員さんと間違われてコピーを頼まれたことも今となっては懐かしい思い出です。

結局3次試験受験までの間、監査法人に非常勤で勤める傍ら大学院に進学して、最終的に会計士の道に進むか研究者の道に進むかという選択に迫られ、研究者の道に進むことにしたのですが、ここでも就職先には苦労しました。教授会のメンバーに女性教員がいる大学はほぼ皆無の時代で、女性ということで採用がこじれたことも多々あったようです。しかしここでも幸い大学院時代の先輩の後押しで何とか職を得て、最後には母校の（会計学の女性教員としては初の）教員にもなれたわけですから、やはりついていたといえなくもありません。

そのような経験をしてきた身としては、最近のダイバーシティ（多様性の受容）や女性活躍推進という時代の風が羨ましくも眩しくもあります。しかしその一方で、個人的にはなんとなく不安を覚えていることも事実です。時代の追い風はいつでも逆風に変わりうることを身をもって経験してきたからです。

女性会計士としてこれから世界に羽ばたいていく後輩たちには、現在の幸運の源がどこからきているのかを常に意識しておいて欲しいと思います。そしてその幸運は、いつでも手をすり抜けていく可能性があるということも。だからこそ、逆風が吹いたときに真価を発揮できる力を身に付けておく、今がチャンスです。

そう考えると、これは女性会計士に限ったことではなく、現在会計士業界が遭遇している様々な課題一般に通じることなのかもしれません。いかなる風向きにもひるむことなく、これからも正々堂々と会計士業界が発展していつくれることを願ってやみません。

「女性会計士が様々な形で 活躍し続けるために」



関根 愛子

(昭和56年理工学部卒業)

早いもので、日本公認会計士協会の会長に就任してから、まもなく1年が経とうとしています。昨年の会報へも寄稿の機会をいただきましたが、その際に掲げた課題に対して、この一年間真摯に取り組んでこられたのも、稲門会の皆様からの温かいご支援のおかげです。改めて感謝申し上げます。

さて、今回は「活躍する女性会計士」の特集に合わせ、女性会計士に焦点をあて、その活躍についての思いをお伝えしたいと思います。

世の中の変化が激しくまた少子高齢化が進む中、ダイバーシティや女性の社会進出への取り組みが政府や民間において進められており、就業者全体に占める女性の割合は全体の45%の水準にまで達しています。他方で、女性の管理職割合は政府目標の30%には及んでおらず、これには、女性が担うことが多い育児や介護の問題も影響しているのではないかと思います。

私たち公認会計士についても、私が初の女性会長となり、女性の比率は、合格者で2割程度、全体で14%程度です。しかし、世界的には女性の会計士の割合はもっと高く、各国の会計士協会では女性会長は珍しくなく、国際会計士連盟の会長は2期連続して女性です。公認会計士として様々な形で活躍していく方を増やしていくためにも、日本でも女性を増やし活躍し続けてもらいたいと思っています。

ご存知のように、公認会計士の業務には男女差はありませんが、多くの方々が最初に従事する監査業務は、地方出張もあり、繁忙期等は非常に忙しい状況です。現在、監査環境の改善や、育児や

介護に携わる方をサポートする様々な制度が充実してきていますが、チームで行われる監査現場へ出向いての業務を育児と両立していくのは難しいと感じ、また、その後一段落した際にも、最新の情報をキャッチアップすることにハードルを感じたりして、継続や復帰が難しいと判断してきた方も少なくないようです。

他方で、復帰している方や公認会計士としての経験を生かして別の職場に就職している方も今はかなり多くなっています。私自身、公認会計士となったのは、いったんやめても復帰しやすいのではないかということが大きな理由でしたが、協会が以前行ったアンケート調査でも、職場に復帰した女性会計士から、復帰しやすい資格であるため、働くことを希望する女性に公認会計士の資格を勧めたい、長いブランクがあっても仕事を再開することができたといった声もきかれていました。

確かに、女性の数が少ない中、働き続けることの難しさを感じたり、ブランクの後復帰することに慎重になってしまうかもしれません。しかし、同様の環境で実際に働いている方々の話がきけたり、復帰のための後押しがあれば、公認会計士の資格や経験を生かして働くことができるのではないかと、生かさないのはもったいないと考え、協会では「女性会計士活躍促進協議会」を設置し、多様な働き方やロールモデルを知る機会を作り、知識のブラッシュアップ研修や復職支援に力を入れると共に、これらを実行するために女性会計士ネットワーク化の促進に力を入れています。

少子化が進む中、女性に限らず男性も、イキイキと働き続けることができ、たとえ、育児等で中断しても復帰することができる社会を作っていくことが必要ですが、公認会計士は、いろいろな働き方ができるという魅力があるので、先頭に立って実践していけるのではないかと思います。

女性に限らず、例えば20代で試験に合格した場合、公認会計士として半世紀を越えて働くことができます。もちろん、その間ずっとフルタイムで働く必要はなく、自分にあった様々な働き方をしながら、後進の育成にも携わって頂き社会に貢献していく、そのような業界にしていきたいと考えています。

「大学時代の影響かな？」



矢野 奈保子

(昭和61年政治経済学部卒業)

早稲田大学では、「外政学会」という学生の会(大学に公認されているもの)に所属していました。会長は外交官試験の試験委員もされた大畑篤四郎法学部教授(当時)で、部室は既に取り壊されてしまった第一学生会館の4階でした。こう書くとも小難しい話をする集まりのようですが、なんてことはない、週に1回は部会を開きますがその後は飲み会、別途分科会を開催しますがその後も飲み会と、飲み会ばかりで他愛もない話をしていました。また、授業の空き時間には部室に行っておしゃべりをし、部員数も20名程度と弱小でしたが、それが密な関係を構築するのにはよかったのかもしれない。特に同期5名は同じ学部だったせいか、四六時中一緒にすごしていました。

そんな外政学会ではありますが、部会等では年間テーマに沿って何冊かの指定文献を読み、レジュメを作り、議論していました。初めてレジュメとやらを作って発表したときは緊張したものです。新人歓迎、夏、春と3回の合宿、文化祭への参加などでも、少人数だからか全員参加して勉強や準備をしたものです。みんな何等かの国際政治・経済、外交や国際法などに関心を有していて、私はとても刺激を受けたものです。いやはや、今では飲んだことばかりを覚えていて、勉強したことは記憶の彼方ではありますが…。

さて、ウズベキスタンという国をご存知でしょうか。中央アジアに位置する旧ソビエト連邦の共和国で、公用語はウズベク語ですが多くの国民はロシア語を使います。ウズベキスタンは人種のるつぼともいわれ、ウズベク人のほか、ロシア人、タジク人など多数の人種が住んでいます。また、

イスラム教徒が多数派ですがロシア正教徒もあり、ソビエト時代の影響かアルコールも一般に販売されています。

ウズベキスタンは1991年8月31日にソビエトから独立しましたが、独立後間もない1999年から2000年にかけて、水道料金の見直しや水道事業改善の業務に関与しました。これは現新日本有限責任監査法人のODA 第一号案件でしたので、ODAの仕事の仕方やプロジェクト管理の方法など未知なことが多く、企画段階から暗中模索の状態でした。しかし、私もこのプロジェクトに参加したいと手を上げました。それはきっと大学時代の外政学会の影響が大きかったからだと思います。

そして今、首都タシケントにウズベキスタンと日本(JICA)により設立された、市場経済に対応できるビジネス人材育成のための「ウズベキスタン・日本人材開発センター(以下、「UJC」という。)」に、年2回各2週間ほど行っています。UJCではビジネスコースとして各種研修やセミナーを開催していますし、日本語教育や相互理解・交流の拠点としても機能しています。筆者は、ビジネスコースで起業家育成の5日間コースの講師、6カ月のミニMBAコースで財務アドバイス、戦略的業績管理などのセミナー講師、起業して間もない会社へのコンサルティングなどを担当しています。UJCの案件に関与するようになったのは偶然ですが、ウズベキスタンにとっても縁があるなあと感じています。

ウズベキスタンの仕事の他にも、エジプトのODAの案件を受託したりしており、日本の仕事との調整が難しいのですが、数年に1案件ぐらいはODAの仕事に従事したいと思っています。そんなことを思い続けているのも、外政学会の「影響」だと思います。思い返せば、入学間もない頃、先輩方が「外政学会は早稲田のオアシスだ」と自負しておられましたが、私にとって本当に大学時代の憩いの場であり、活力をくれた場所でもあり、今に続く影響力もあります。皆様にもきっと現在に続く早稲田時代の「影響」が何かあるのではないのでしょうか。

「リーガルマインドと会計・監査論」



山崎 諒子
(2007年法学部卒業)

こんなことを言うと、学部仲間内では怒られてしまうかもしれませんが、私が法学部に入学したことに、あまり深い意味はありませんでした。現在、大学を卒業して丸10年。公認会計士試験合格後、すぐに大手監査法人に入所して、現在マネージャー職として勤務していますが、この業界には経済や経営、商学系の学部を卒業した仲間たちが数多くいます。

私が公認会計士を目指そうと思ったのは、ちょうど就職活動を始める大学3年生の終わり頃。今でこそ女性活躍推進と騒がれる世の中ですが、バリバリ働く母の背中を見て育った私にとって、性別など関係なく、将来社会に出て活躍することは幼い頃から当然のように思い描いていた未来でした。法学部生だった私がなぜ法曹界ではなく公認会計士を目指そうと思ったのか、とはよく尋ねられますが、それについては長くなってしまうのでまたの機会に。

さて、そんなわけで業界では珍しい学部を卒業していますが、そのおかげで今とても役に立っていることがあります。それは“思考力”です。会計士になるための勉強をスタートした頃は、数字に裏打ちされた会計の世界は、何事も白黒はっきりする場所なのだと思っていました。けれど、企業を取り巻く事象というのは、1円玉を見て誰もが1円だなど思うように単純明快に数字で表現できることばかりではなく、実際には、会計処理の選択や見積りの要素などがあり、結果として財務諸表に示される数値をはじきだすための論理構成に対して、思考力を試されるようなシーンが無数に存在していました。学部生の頃は、養うべき物事の考え方として“リーガルマインド”(法律の実際の適用に必要とされる柔軟かつ的確な判断)

という言葉をよく耳にしましたが、相手が法律でなくとも、会計基準に基づく柔軟かつ的確な判断はこの業界でも大いに必要な能力です。具体的には、こんなことがいえるでしょう。

- ・ルールに事実を当てはめて解決する力(当てはめるべきルールが法律なのか、会計基準なのかの違い!)
- ・集めた情報が意見なのか事実なのかを判断する力(裁判での証拠は監査証拠に通ずる!)
- ・複数の当事者の言い分を総合的に判断する力(裁判でいえば当事者は原告・被告。会計監査の世界でも、クライアント、その取引先、監査に利用する専門家など様々な人物の声に耳を傾ける必要あり!)
- ・物事を多面的に捉える力(これは言わずもがなです!)

会計士として働く中で、こういった思考プロセスを行うたび、学生時代に学んだことを思い出すものです。

もちろん、監査上、検討した内容は文書化する必要が生じます。学生時代には論文を書く機会も多かったため、そこで培った文章力も監査調書の作成に大いに活かされています。ときに監査業務のほか、専門書の執筆に携わる機会もいただいています。そんなところでも力を発揮できているように感じます。

縁がないようでいて、根っこはつながっている法律学と会計・監査論。学生時代の仲間たちとはほぼ別の道を歩んでいる私ですが、あの学び舎で共に学び、議論を交わした経験はしっかりと私の中に根付き、今、会計・監査という新しい養分を得て、大きな葉を広げています。

そんな大樹(?)の最後のエッセンスはプロフェッショナル精神でしょうか。法律家であれ会計士であれ、専門家であるということは個として業務を遂行できるということです。私たちの業界は、プロであることを何よりも重んじています。かねてより意識せずとも女性活躍ができる業界だったと思いますが、最近は所属法人も、とても女性活躍推進に力を入れているよう……。過去に培った経験・知識と、現在の環境が相まって、来たる将来、誰も想像していないような花を咲かせたいと思っています。

「プラントエンジニアから 公認会計士への転職」



福住 哲生

(2010年理工学部,2012年先進理工学研究科卒業)

1. 合格までの道のり

大学・大学院では電気工学および数値解析の研究をしていました。そして、2012年に大学院を修了した後は、まずビールメーカーでプラントエンジニアとして働き始めました。プラントエンジニアの仕事では、設備投資の基本計画の検討、設備設計、工事監督、設備メンテナンス、オペレーター指導、エネルギー管理などに携わりました。その中で、メーカーにとって、製造拠点をどこに置くかということは非常に重要なことであるということを実感致しました。なぜなら、飲料のように物理的な重さに対して販売単価が比較的安い製品は、運送費と製造コストの両面から設備投資を検討する必要があったからです。

特に海外に日本のビールを販売するためには、輸出よりも現地生産をすることが合理的であるということを知りました。そのため、プラントエンジニアとして、海外の工場の運営に携わり、会社に貢献したいと思いました。そこで、海外事業について調べると、ビール業界では工場の立ち上げを1からするのではなく、M&Aを行って、買収した企業の工場を改造し、自社ブランドを製造することが一般的であることを知りました。そのとき、会計の専門性を磨きたいと思いました。プラントエンジニアと会計の知識の両方を持てば、M&Aなどを通じて、もっと会社に貢献できるのではないかと考えたからです。元々、大学生時代に日商簿記1級までは取得していました。しかし、連結会計や国際会計基準などの知識について、不足を感じていました。

そんなときに、公認会計士を受験しようと決意をする転機となったのは、友人との食事の中の会話でした。その友人は、休日にも忙しくしており、予定が合わないことが多かったため、久しぶりに会ったのですが、忙しかった理由を訊くと公認会計士試験を受けていたというのです。そして、公認会計士試験の勉強について、詳しく話してくれました。社会人でも公認会計士試験に合格する人がいること、また、社会人受験者向けに予備校が通信教育を行っていることも知りました。

次の週末には通信教育に申込み、出勤前や帰宅後、休日など出来るだけ時間を作り受講しました。しかし、一方で目指す姿のためには、プラントエンジニアとしても技術を磨く必要があり、試験を理由に仕事を疎かにしては、本末転倒だという想いがありました。そのため、仕事の方でも、高いレベルの個人的な目標を立て、公認会計士試験合格発表までに達成することを決意しました。

仕事でもプライベートでも大変なときもありましたが、妻や親をはじめとして、周囲の支えもあり、無事に両方の目標を達成することができました。この場をお借りして、感謝申し上げます。

ありがとうございました。

2. 今後の夢

公認会計士試験を目指したときから変わらず、プラントエンジニアと会計の知識を持って、M&Aに携わりたいという想いがあります。一方で、公認会計士試験の勉強を通じて変わった想いとして、会社だけでなく、社会や日本経済に貢献したいと考えるようになりました。そのため、将来はプラントエンジニア時代の経験も活かしつつ、公認会計士としてM&Aなどのアドバイザー業務を行いたいと考えています。日本のメーカーが海外に進出する際に、お手伝いできるような会計士になりたいと思っております。そこで、2017年3月末に新入社員の頃からお世話になったビール会社を退職し、4月から監査法人に勤務しております。

今後も、できる限り稲門会に参加させて頂きたいと考えております。まだまだ未熟者ではございますが、何卒宜しくお願い致します。

「合格までの道・合格してから思うこと」



藤田 彩

(2007年社会科学部、2010年会計研究科卒業)

このたびは、試験合格者としてしまして、公認会計士稲門会の会報に寄稿させていただく機会をいただき、大変光栄に思っております。稚拙な文章ではありますが、よろしくお願いいたします。

1. 大学院に入学するまで

私が会計士試験を始めたのは、大学を卒業する年でした。就職活動をしました。昔からの夢であった、専門分野を持ち、それを活かして働きたいという思いが就職活動をする中で強くなり、会計士試験の勉強を始めました。

卒業後は地元に戻って、受験に専念することができず、東京で塾講師をしながら、受験生活をしました。慣れない講師の仕事との両立は、体力的、精神的に限界があったことと、会計大学院に通った友人からの勧めもあり、受験に専念できる環境を得たいと思い、会計研究科への進学を決めました。

2. 大学院での生活

大学院での生活は想像以上に恵まれた環境でした。

まず、受験勉強をバックアップしてもらえる体制が充実していました。自習室や会計研究科生専用の図書室をはじめ、授業も、会計士試験と重なる科目が多いです。ただし、予備校の授業とは違って、背後にある考え方を考える授業が多く、違った角度からの奥深い学習ができました。会計研究科でしかできない経験だと思います。

それに加え、大学院生としての充実した生活も送ることができました。ゼミ形式の授業も多いですし、多言語を操る優秀な留学生の方々との交流もたくさんありました。特に印象に残っている授業は、英文の財務諸表を読み、グローバル企業の研究をする授業や、日本語を一切使わず、英語で討論する授業です。

そして、大学院では、将来同じ道へ進む友人た

ちに出会え、本当に良かったと思います。修了後も交流は続き、現在も続いています。また、在学中は、先に合格した友人に支えてもらうこともあり、感謝しています。

3. 修了後から現在

2011年、大学院卒業時と会計士の就職氷河期が重なりました。合格するまでは会計士試験の受験をもちろん続けるつもりでしたが、合格者が監査法人に就職できないという予想外の状況を目の当たりにし、受験生活を続けることに不安を感じました。そこで、大学院卒業を機に、一般企業の財務部へ就職することを決意しました。しかしその当時から、時期が来れば受験を絶対に再開したいという思いを持っていたので、2年前に受験を再開し、このたび合格することができました。

まだ、監査法人に入所して半年目ですが、一般企業での経験と比較して、監査法人で働くことの良さを実感しましたので、現時点で感じたことを少し挙げてみたいと思います。今回は女性会計士の特集とおうかがいしましたので、私が前職で感じたことは、特に女性が働く際に、抱える悩みと重なるのではないかと思います。

私が感じた主な違いは、キャリアパスがしっかり見えること、キャリアを真剣に相談できる環境にあること、成長の機会があることです。

前職では、キャリアパスが明確に見えないがゆえに、長期的な目標を持つことができませんでした。一方、監査法人では、一人前の会計士になるという明確な目標があり、目標となる方々も周りにいらっしやいます。余計な部分で迷うことなく、目標に向けて精進できると思います。

また、監査法人では、キャリアをととても大切に考えてもらえます。自分が活躍したい方向性などの意思も、面談の機会にお話しできます。同じ道を辿っているため、先輩方にも相談しやすいです。前職では、そのような機会はなかなかありませんでした。

今は、大変恵まれた環境にいることに感謝しています。スタート地点に立ったばかりですが、今後求められる会計士とは何かを考え、会計士としての基礎を作りながら、さらに自分の強みを作っていきたいと思います。最後までお読みいただき、ありがとうございます。今後とも稲門会の一員としてどうぞよろしくお願いいたします。

「事業会社勤務を経て」

りんこう あや
臨光 彩

(平成12年商学部卒業)

私が公認会計士を志したのは37歳の時。一般事業会社に就職して14年目、管理職になる手前でのことでした。早稲田大学商学部に入學したのは平成8年で、当時は広告理論研究ゼミに所属。卒業後は不動産会社に就職し、分譲業の営業や経営企画の仕事に従事していました。そんな、会計については全くの門外漢の私が、なぜ会計士を目指そうと考えたのか。また、今後どのような会計士になりたいかについて、以下お伝えしたいと思います。

私は不動産会社入社後、分譲物件の販売を行う部門に配属されたため、宅建士として必要な不動産取引に関する知識を身に付けるとともに、担当物件の販売戦略や、プロジェクト収支に関する知識を増やしていきました。

入社して3年が経ち、販売業務の全体像を掴んできた矢先、今度は経営企画部に異動となり、そこで初めて、分譲物件の「後収支」と呼ばれるもの(会計期間に縛られず、1つのプロジェクトの用地取得から完売までをPLの形で表したもの)を目にしました。その「後収支」を見ると、「高値販売に挑戦した物件」、「販売の長期化を避けるため、早期に価格改定をして売り切った物件」、「立地がよく、相応の集客が見込めるため、極力広告宣伝費を使わずに販売した物件」等、これまでの上司や先輩、それに自身の思考や努力が次々と数字から伝わってくるようでした。定性的な営業の努力は、定量的な結果となって表れている。数字を共通言語として使いこなせれば、もっと部門間の調整や議論は建設的なものになるのではないかと。そう実感した瞬間でした。

経営企画部に異動すると、自身が携わっていた分譲業以外の事業の収益構造に関する理解や、BS、CF等のPL以外の財務諸表に関する理解、目標管理制度、退職金・退職年金制度等の会社の諸制度に関する理解、あるべき事業ポートフォリオの検討等、各段に広い知識と視野が要求されるようになりました。ここでもまた、共通言語としての数字を通して会社経営を見る視点に強く興味を惹かれ、ビジネススクールにおいて、ビジネス定量分析、アカウンティング、ファイナンス等を学び、次第に「もっと数字を自身の強みにできないだろうか」と考えるようになりました。

会計士という資格を意識するようになったのは、上述のビジネススクールにおいて、アカウンティング基礎の講師であった投資ファンドの副社長が会計士であり、講義中に監査法人勤務時代の不正発覚事例を紹介した時でした。ビジネススクールにおけるアカウンティングの講義は、数字を「読む」ためのものでしたが、そのエピソードを聞いたときに、「読む」ための適正な数字を「保証する」ということに対しての興味が生まれました。

私は6年間経営企画部に在籍した後、2年間事業部に戻り、さらに2年間、親会社のシンクタンク部門に出向となり、複数の連結子会社、持分法適用会社を持つ企業の中で、より大きな経営的視点に触れることができました。ジョブローテーションにより多面的な視点を身に付け、一つの会社でジェネラリストとなるには十分な経験を積ませてもらいましたが、「会社の看板をなくしても、一般の人材市場に出て通用する強みを身に付けたい」という気持ちが日毎に強くなり退社を決意、会計士資格の取得を目指すに至りました。

以上の経験を踏まえ、将来的には「有資格者として監査・会計に関する知識・見識をコア・コンピタンスとしながらも、企業経営に関する総合的な課題解決をサポートできるコンサルタントになりたい」と考えています。

第二の社会人人生のスタートは決して早いものではありませんが、監査の実務を通じて諸先輩方から多くのことを学び取り、向上していきたいと思っています。

「公認会計士試験合格祝賀会」



松下 八寿彦
(1980年 商学部卒業)

3月21日にリーガロイヤルホテル東京において、公認会計士試験合格祝賀会が盛大に開催されました。平成27年の公認会計士試験の最終合格者数は、1,108人（対前年比57人増）、合格率10.8%でした。本学最終合格者数は96名（学部・大学院全体では130名）でした。当日は、約50名の合格者、会員約50名が参加しました。

ここ数年、受験者数、合格者数が横ばいです。気になる点は、一般企業の就職状況が良いためか

本学等の有力大学の受験者数が通減傾向にあることです。業界の魅力等PR活動が必要と思います。

本合格祝賀会は、早稲田大学公認会計士講座（簿記検定3級～1級の受験指導をOB・OGが行っているそうです）と公認会計士稲門会の共同主催です。本祝賀会への合格者の出欠確認、受付等を会計士講座の学生スタッフの皆さんが手伝ってくれています。また、本祝賀会の運営費は、会費とご寄付で賄っております。この場を借りて御礼いたします。

公認会計士講座関口幹事長、渡辺俊之会長の挨拶、小林 晟祐相談役の乾杯の発声、大学から辻山栄子先生、長谷川恵一先生、秋葉賢一先生からご祝辞をいただきました。その後、合格者の自己紹介があり、合格者と会員との歓談で大いに盛り上がりしました。早稲田大学応援部による『紺碧の空』、『早稲田の栄光』、『早稲田大学校歌』斉唱、和やかな内に20時30分散会となりました。

その後、2次会を1階のフェリオで開催しました。



編集後記

本号は、稲門会のOGの関根愛子氏が日本公認会計士協会会長に就任されたこともあり、『活躍する女性会計士』を特集しました。

監査業務が多忙の中、たくさんの女性会員からご寄稿いただきました。この場を借りて、御礼申し上げます。

公認会計士稲門会奨学金の奨学生からも寄稿いただき、奨学金が役立っていることを改めて実感しました。

（会報担当 松下八寿彦、編集委員 小口敬、古知新、衛藤祐介）

（印刷所 三共総合印刷株式会社）

「早稲田散歩(1) 大隈記念タワー」

松下 八寿彦

(1980年 商学部卒業)

大隈記念タワーは、第二学生会館跡地に創立125周年のシンボルとして125尺の大隈講堂（大隈重信公の人生125歳説にちなむ）に対して250尺（75.75m）、対峙して聳え立っています。外壁は、大隈講堂と同系統のタイル仕上げで隣の小野梓記念館（主に法科大学院で使用）とも調和しています。



左：大隈記念タワー / 右：大隈講堂
(大隈庭園から撮影)

このタワーは、教室として使用されていますが、我々校友も知らない施設があります。15F レストラン森の風と16F 校友サロンです。ガラス張りのレストランからは、大隈講堂や大隈庭園、本部キャンパスを一望でき大満足。ランチ、ディナーもお手頃価格。同窓会他各種懇親会に打って付けです。校友サロンは、校友会費で運営しており早稲田カード所有者は無料。小会議室もあり、ドリンク無料、待ち合わせ、会合に利用できます。詳細は、大学HPご覧ください。



15F レストラン「森の風」
オシャレなインテリア



16F 校友サロン



晴れた日には富士山も見えます